

いちごのアザミウマ類の適切な防除を行い、 春先の被害増加を抑えましょう！

今作のいちご本ぼでのアザミウマ類の発生は、11月に「やや多い」状況でしたが、12月以降は「平年並」で推移しており、2月上旬のいちご本ぼの巡回調査結果は、発生ほ場率17.5%（平年比106.1%）、寄生花率0.8%（平年比66.7%）と平年並の発生です（図1）。ハウス内の温度が高くなるこれからの時期は、アザミウマ類の活動が活発になるとともに発生量が増加しやすいため、被害が大きくなる場合があります。アザミウマ類が多発すると、一度の防除では被害の抑制が困難になるので、ほ場をこまめに観察して少発生のうちに防除しましょう。

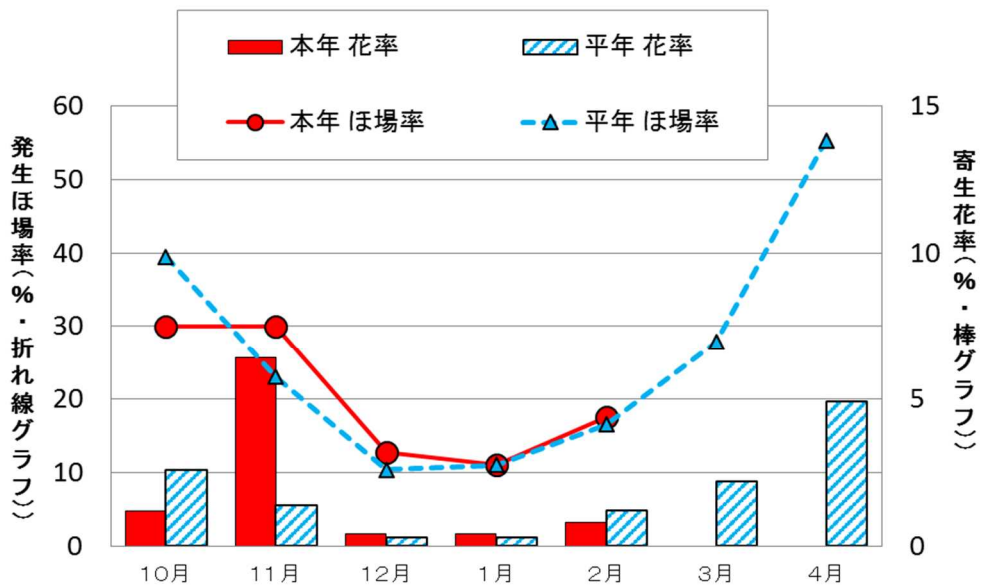


図1 巡回調査による果実加害性アザミウマ類
発生ほ場率・寄生花率



写真1 幼果の被害果



写真2 ヒラズハナアザミウマ
雌成虫（黒色）と雄成虫（黄色）

◎防除対策

- ・表1を参考に薬剤を使用する。アザミウマ類の発生初期から IGR 剤を散布し、発生量を抑制しましょう。また、幼果に写真1のような褐変が、ほ場内で僅かでも見られる場合は、アザミウマ類が増殖している証拠ですので直ちに防除が必要です。
- ・1割以上の花でアザミウマ類（写真2）が見られるときは、IGR 剤だけでは抑制が難しい状態です。ディアナ SC やスピノエース顆粒水和剤、ファインセーブフロアブルなど成虫にも効果の高い薬剤も使用しましょう。
- ・ハウスの換気量が増大する時期になると、ハウス外から大量に成虫が飛び込んで来るので、成虫にも効果の高い薬剤を交えた防除が必要になります。
- ・多発時には、薬剤がかからない卵や蛹が混在するため、一度の薬剤散布では防除することが困難です。IGR 剤の散布から約5日後に、スピノエース顆粒水和剤などを追加散布することで、高い防除効果が得られます。
- ・浸透移行性のない薬剤は、かけ漏れがないよう散布しましょう。

表1 いちごのアザミウマ類で適用がある主要薬剤（平成31(2019)年2月28日現在）

薬剤系統名	農薬名	防除の対象	収穫前日数	天敵カブリダニ類との併用	ミツバチ影響日数	IRACコード**3	浸透移行性	殺虫効果
IGR (ベンゾイル尿素)	カウンター乳剤	幼虫	収穫前日まで	可	1日	15	無	遅効性、 残効長い
	マッチ乳剤*1	幼虫	収穫前日まで	可	1日	15		
スピノシン	スピノエース果粒水和剤	成虫・幼虫	収穫前日まで	*2	3日	5	無	速効性、 残効短い
	ディアナSC	成虫・幼虫	収穫前日まで	*2	3日	5		
ピレスロイド	アーデント水和剤*1	成虫・幼虫	収穫前日まで	不可	2日	3A	無	速効性、残効長い
—	ファインセーブフロアブル*4	成虫・幼虫	収穫前日まで	可	1日	—	無	速効性、残効長い
ジアミド	ベネビアOD	成虫・幼虫	収穫前日まで	可	1日	28	*5	遅効性、残効長い

*1 適用病害虫はミカンキイロアザミウマ。

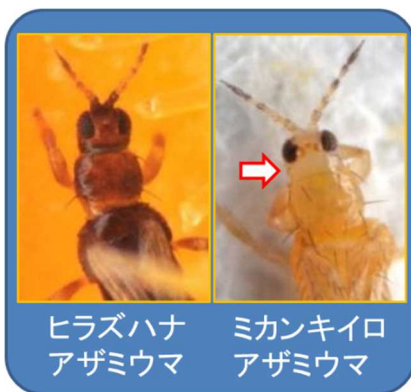
*2 天敵カブリダニ類に影響があるので、基本的には天敵を放飼してから1か月後以降に使用する。またアザミウマ類、ハダニ類の発生状況をよく見て判断する。

*3 IRACコードが同一のものは作用点が同じなので、薬剤抵抗性発達回避の観点から連用を避ける。

*4 ファインセーブフロアブルは展着剤を加用し、濡れ性を高めて使用する。

*5 葉面への浸透性、根からの吸収移行性がある。

◎いちごを加害する主なアザミウマの見分け方（ヒラズハナアザミウマとミカンキイロアザミウマ）



・ヒラズハナアザミウマ

体色は褐色系で複眼のすぐ後ろの刺毛は目立たない

・ミカンキイロアザミウマ

体色は黄色系で複眼のすぐ後ろの刺毛は目立つ（⇒）

詳細は、農業環境指導センター（TEL 028-626-3086）までお問合せ下さい。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部 (@tochigi_nousei)」、農業環境指導センターホームページ（<http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。